

令和6年度 自己評価シート

認定こども園 おりーぶの森

1. 教育・保育理念

子どものよりよい成長と発達を願い 子どもには楽しさを 保護者には安心を 第一義に考え
地域になくてはならないこども園を目指す

2. 教育・保育方針

発達を促せるように、一人ひとりを大切にする

- ・生きぬく力、人のいたみのわかる 子どもを育成する
- ・自己肯定感、自尊心の持てる 子どもを育成する
- ・仲間とあそぶことにより、社会的な人格を形成するための基礎を育成する
- ・自然に触れることにより、子どもの感性を育成する

3. 評価項目の達成及び取組状況

評価項目	取り組み内容	自己評価
職員間の共通理解を図りながら、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえ、園の理念・方針にしたがい、全体的な計画を編成・実施している。	教育・保育要領を理解し、保育の中でどのように反映させていくのかを職員会議や園内研修などの機会に職員間で話し合い、共有し活かしている。今後もさらに全職員で共通理解を深めて、保育を行っていききたい。	A
指導計画は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、全体的な計画、子どもの実態などをもとに考えて作成し、評価・改善を行う	全体的な計画や教育課程をもとに各種指導計画を作成している。年度末の職員会議には、子どもの実態をもとに、年間指導計画の見直しを図っている。月間指導計画や週案等については、以上児クラスは期ごとの指導計画にするなど、子どもの育ちや成長をしっかり捉え、子どもの成長や興味関心に基づいて作成している。行事は、ねらいや内容を明確に示し、指導案を基に実践している。今後、行事についても在り方を再確認し、より意味のあるものになるよう改善を図っていく。	B
子どもの実態を的確につかみ、具体的な手立てを講じる。	日々の保育の中でのエピソードなどから、子どもの育ちを捉え振り返り、翌日の保育へと繋げている。日々、子どもの主体性を大切に考え尊重し、一人ひとりの興味関心を見逃さず、十分に満たしていけるような環境構成や子どものかかわり方について具体的に考え、保育の充実に努めている。今年度は出前相談を活用し、配慮の必要な園児へのアドバイスをいただくことができた。次年度も引き続き活用し、合理的配慮を目指していきたい。	B
各クラスの成果と課題を報告する。	日々のミーティングや職員会議で、保育の中のエピソードやクラスの様子などを報告したり、クラスの日誌やおたより、動画配信のアプリ内での閲覧などにより共有することで、子どもへの理解を深めたり、各クラスの保育内容を共有している。今年度は毎月、クラスミーティングを実施し、クラス担任全員で保育の実態を振り返ること、共通認識のもと保育を行うことができた。今後もよりよい保育を目指していきたい。また、合理的な配慮の必要な子どもや保護者についても、情報を共有し全職員で一貫したかかわりができるよう努めていきたい。	A
子どもの良さを認めて評価しようとしている。	一人ひとり、発達課題が異なり、また、一つ一つの行動にはその子なりの意味があることを理解した上で、受容、共感することを大切にかかわっている。「なぜそのようなことをしたのか」ではなく、「どんな目的でそのようなことをしたのか」と行動の意図に目を向け問うこと、そして一人ひとりの声に耳を傾けしっかりと聴くことを徹底することで、一人ひとりの一つ一つの行動を肯定的に捉えていきたい。	B
あそびを通して工夫したり、協力したりする姿が見られる。	子ども同士でのあそびの中で、共通の目的を持って相談したり工夫するなど、意欲的にあそびを広げている。保育教諭はそのために必要な環境を整え、感性豊かにかかわることを大切にしている。今後は、さらに環境構成に重きを置き主体的に遊びを展開できるよう、考えていきたい。	B

規則正しい生活習慣の定着、手洗いうがいの定着等に向けての指導を行う。	プールあそびをする機会には改めて朝食の大切さについて、子ども達には視覚教材を用いてわかりやすく話す機会を持った。また保護者に向けて、プールあそびでの事故防止であることも含めて、バランスの良い朝食を摂ることのお願いをした。理解され徹底されていたように思う。就寝時間が遅いなど、生活リズムが乱れている家庭には、個別に働きかけるなどを行ったが、なかなか難しいと感じる部分がある。看護師による保健指導では、からだのしくみや生活習慣について学ぶとともに、手洗いの実践等を行った。日常生活の中で、丁寧な見守りやかかわりを行い、子ども自身がしっかり獲得できるようにしていきたい。	B
季節の草花を園庭に植える。 生き物を飼育する。 各コーナーのおもちゃ、絵本の充実を図る。	園庭には草花や木々があり、草花や虫などに身近に触れることができる環境がある。子ども達は草花や虫を積極的にあそびに取り入れ、日々様々な発見をしている。飼育しているうさぎは、お話をしたり、金網越しに草をあげたりと年齢に応じた触れ合いを持っている。昆虫など、生き物の飼育の機会が全体的に少ないように感じる。各クラスでさらに大切な機会と捉え大事に取り上げていきたい。各クラスのコーナーのおもちゃは子どもの興味や発達によって入れ替えるなど、保育環境の再構成を行っているが、子どもの興味関心を踏まえ、さらに充実していきたい。	B
日々の生活と遊びのを通して「食」に関わる体験を積み重ねることで、「食を営む力」を育成する。	年齢ごとに畑やプランターで作物を育て、その生長に触れ、収穫した作物を実際に口にするこ、食べることへの興味関心が深まり、意欲的に食べようしたり、「おいしい」と感じる事ができた。また、給食の食材に触れたり、野菜の皮むきや食材を切ることを手伝ったりする経験もできた。5歳児は、園外保育でますの掴み取りをし実際に食べる体験を行い、さらに、秋サンプラの食育や蛙の解体でも、命をいただくことについて学ぶことができ、魚に興味を持つ様子も見られた。4歳児から5歳児に継続される食育として、味噌づくりを行うことができ、食することができたのは、とても貴重な経験となった。	A
衛生管理を徹底し、感染症の予防と集団感染を防ぐ。	看護師による毎日のドアノブの消毒、おもちゃの洗濯や消毒、保育室の消毒などをより徹底し、引き続き感染症を含む各種感染症の予防や感染拡大防止に努めている。食事はコロナ以前に戻り対面で摂れるようになった。マスクの着用は感染症の拡大が懸念されるなどの必要な場合のみに行っている。感染症が確認された際には、室内環境の消毒を徹底的に行い、また保育環境を工夫し感染拡大を防ぐための対策を行った。	A
特別支援教育の理解を深め、一人ひとりに必要な配慮をしながら、発達の支援をする。 家庭、医療機関、関係機関等との密な連携を図る。	配慮が必要な子どもに対しては、家庭や関係機関との連携を図りながら、一人ひとりの発達特性や障がいについて十分に理解した上で、個別の支援計画を作成し支援を行っている。他児とのかわりの中で共に成長することを大切に捉え、合理的な配慮を行っている。今後は、療育支援や病院などとの連携を今まで以上に深め、より専門的な支援を行ってきたい。今後は、さらに保護者を巻き込んだ支援が必要と考える。	C
小学校へのスムーズな接続が図れるような工夫や取り組みを積極的に行う。 幼保小連携研修に参加する。	12月には近隣の協力を得て、学校見学を行うことができた。教室で授業見学をしたり、校内見学をすることができた。また1年生と校庭で遊ぶ経験もでき、とても良い経験となった。また、子ども達が入学予定の小学校をバスで巡ることもでき、就学を控えた子ども達にとっては、とても貴重な機会となり、安心感や期待感へと繋げることができた。次年度は、年長の担任が小学校1年生の授業を見学させてもらうことで、就学後の姿をイメージしながら保育を進めていこうと考えている。	B
職員の安全管理の意識を強化する。火災・地震などの災害発生時、不審者侵入時の安全確保のための通報・避難・保護の方法手段を共有し、訓練を行う。防災・防犯マニュアルを策定する。	毎月の避難訓練やその他様々な災害を想定した訓練を行い、非常時に対する意識を持てるようにしている。不審者対応訓練では、問題点について振り返り、緊急時の対応について考え改善することができた。今後もさらに様々な想定での訓練を行い、全職員が主体的に判断し動けるようにしていきたい。	A
園だよりやホームページ等で、教育・保育の状況を伝え、保護者と情報共有を図るとともに、理念・方針への共通理解を図る。	日々の保育日誌はクラスに掲示したり、アプリで配信したり、連絡ノートで共有している。アプリでの動画配信も行い、クラスごとに伝えたい子どもの姿を届けられた。また、行事やクラスの様子は、園だよりやホームページ等でわかりやすく伝えている。送迎時は、子どもの様子を保護者に伝え、共に成長を喜ぶ機会になっている。保育参観weekでは、日々の保育を見てもらい機会となっている。絵画足形展では、園で大切にしている描画活動やだし保育の実践を報告・共有する良い機会となっている。次年度はInstagramを活用しつつ、園の保護者のみならず、地域の人々に向けても情報発信をしていきたい。	B
地域の子育て家庭に対して、子育てに関する情報の提供や気軽に集える交流の場を提供している。	子育て支援「たんぽぽのへや」を週2回、その他の日は園庭開放を行った。子どもの主体的な遊びを大切にし、その重要性を伝えるよう心がけ、母親に寄り添い支援を行っている。参加者がいない日もあったため、今後はさらに親子の触れ合い遊びなどを多く取り入れ、家庭での子育てが豊かになるような支援を目指すとともに、看護師による栄養・発達相談が充実していけると良い。そして、地域の保護者同士を繋ぐ場になるよう努めていきたい。	C
教育・保育の質の向上のために、園内研修を充実させる。また、各研修会や研究会に積極的に参加し、職員に情報提供や資料提供をする。	学び続ける姿勢を大切に、職員一人ひとりの技能・技術の向上を目指している。キャリアアップ研修の他、視察研修に参加し、他園の保育や環境に触れることができた。また2月の研究発表研修会では、他園の保育教諭とグループディスカッションを行い、情報交換などの良い機会となった。全職員での園内研修では、昨年度に引き続き「リズムあそび」について実践中心の研修を行い充実を図ることができた。日々の保育の中でさらに充実を目指していきたい。	A
職員の心得を熟読し、職員としての質の向上をはかる。	一人ひとりが認定こども園の職員としての自覚を十分に持ち、子ども、保護者、職員とかわかっている。一人ひとりの個性や強みを活かしながら主体的に職務にあたっている。子ども一人ひとりに寄り添い尊重しながらかわることの大切さを共通理解できた。今後さらに、一人ひとりが向上心と意欲を持って活き活きと働けるよう努めていきたい。	B

4. 総合的な評価結果

理 由	自己評価
保育に関しては、年齢ごとに子どもの興味関心に応じた、子ども主体の保育を心掛け、必要に応じて見直したり、改善を図り、子どものよりよい育ちを大切にしました。行事や遠足などは、保護者の参加や協力を仰ぎ行うことができたものも多くあり、園と保護者とが協力して子どもたちの育ちを見守ることができた。園内研修では、職員全体でのリズム研修を行った。実際に動きながら、体の発達や動きの確認などを行い現場に活かすことができた。	B

「3. 4. 」の評価結果の表示

評価	十分達成されている	A
	達成されている	B
	取り組まれているが、成果が十分でない	C
	取り組みが不十分である	D

5. 今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
主体性を尊重した保育	3・4・5歳児については、子ども同士の助け合いや自主性・主体性を育むこと、また、年上の子がリーダーシップをとったり年下の子が上の子を真似て学んでいくことで、子どもの社会性や自然な発達を促すことを目的として、令和8年度より縦割り保育を取り入れようと考えている。そのため、次年度については、日々の保育の一部分や希望保育期間中などを通して、3・4・5歳児の縦割り保育を取り入れていく。
保育の充実のための環境を整える	目の前の子どもの興味・関心に向き合い、日々適切な環境を整え、環境からかかわることを徹底していく。
地域社会に主体的にかかわることで、行為の主体として社会に参画していく	子どもも社会の一員であること、社会に貢献できる力を持っていることを日々の保育活動を通して伝えていく。地域の環境問題などについて考え、自分たちが今できることを考え行動することで、人の役に立つことの嬉しさ、楽しさを知っていく。
少人数でのクラス編成を行うことで、障がいの有無にかかわらず、一人ひとりの発達特性を理解した上で、必要な配慮や支援を行う	障害の有無にかかわらず、それぞれ得手不得手があり、一人ひとり、配慮が必要な時がその都度あることをまずは頭に置くこと。次年度から3歳児クラスのみならず、4・5歳児クラスにおいても2クラス編成となる。こうすることで、今何ができて、何に困っているのかなど、子ども一人ひとりの状況をしっかりと見極め、理解した上で、合理的な配慮や支援を行っていくことが可能と考える。

令和6年度 保護者・こども園関係者評価

令和6年度 保護者会会長

一人ひとりを大切に発達段階に応じた保育をしていただいています。
子ども達は自然に触れ合いながら、沢山の経験をさせてもらい、毎日楽しく過ごしている姿があります。
日々の様子をアプリで配信してもらったり、送迎時に伝えてもらえたりと、私たち親は、安心して預けることができています。ありがとうございました。